

## リヒテンベルクの生涯

——大学入学の頃の教師たち——

### 佐々木 滋\*

ゲオルク・クリストフ・リヒテンベルクが勉学の地をゲッチンゲン大学に選んだ経緯はすでに述べた<sup>1)</sup>。この大学の別称 Georgia Augusta は当時としては最もモダンにしてリベラルかつ自然科学の精神に富んだ大学であった。リヒテンベルクは1763年5月6日にこの地に到着する。かれが来た当初は有名な研究者がそう多くいたわけではない。歴史家ガッテラー、数学者アブラハム・ケストナー、そしてリヒテンベルクよりは4週間遅れで赴任する古典文学者のハイネなどがその有名な教師であった。1780年頃にはドイツの大学でも最先端に位置したという<sup>2)</sup>。5月11日かれは学長代理、神学者ヴェルヒによって数学・物理専攻の学生として学籍簿に登録された。最初の下宿先は翌年の復活祭まで市の書記員ホルン宅であり、同年秋にはかれの実兄ルートヴィヒ・クリスティアン・リヒテンベルクがハレでの勉学地から今度はガッテラーとピュッターのもとで文書司書学を修了させる目的で弟と一時同じ大学町で勉強をすることとなった。兄は9年前の1754年秋からハレで神学を学んだのであったが、この冬の1学期だけをゲッチンゲンで過ごし、翌年にはゴータ大公の文書室での仕事をを得るのであった。兄の住まいは金細工師クナウワー方であった。64年の復活祭に兄がいたこの下宿に弟が移り、67年夏まで約3年以上をここで過ごした。ホルン宅はいくぶんか落ち着かず、家賃もやや高かったのであろう。1740年建造というこの家は学生の行き交う賑やかな学生街に位置し、パウリナー教会の入り口を正面に、周囲の家はみなクナウワー宅のように3~5名の下宿学生をかかえていた。ただ1軒だけ隣接する家は学生をおかなかった。それは物理学のホルマン教授の家であり、下宿生をおく必要性がなかったのであろう。

大学での勉強を個々にどう組み立てていたのか詳細は不明である。ただケストナーの講義だけは在学中一度も欠席しなかったようである。ここに来る前からダルムシュタットでかれの数学の教科書に親しんでいたのであった。ケストナーの講義は基礎数学、応用数学、解析学、天文学、物理学であった。しかし、かれに欠けているのは、首尾よい実験結果、適切な実験器具、関心であったという<sup>3)</sup>。それでもリヒテンベルクはケストナーを師とみなし、常に感謝の念をうちに秘め生涯それを保った。たとえリヒテンベルクにうち解けないことがしばしばあっても、ケストナーの気紛れにも逆らわなかった。学友のなかでひとたびケストナーに逆らうものがあると、たとえ自説が正しくも多大な怒りをもって応えられた。

当時44歳のアブラハム・ゴットヘルフ・ケストナー<sup>4)</sup> (1719~1800年)は鋭敏な思考をする人であり、性格の厳しさは心の温かさで和らげられ、貧者への施与は知られていた。子供のないかれは子供たちにも優しくかったらしい。結婚期間はまことに短いもので、1756年

\* 一般教育 助教授 ドイツ文学

の復活祭にライプチヒからゲッチンゲンに職を得て同年9月にライプチヒのロジーネ・バウマンと結婚するが、2年後の3月にはやくも妻に先立たれる。ゲッチンゲン大学にとってケストナーは大きな価値をもっていた。改訂に改良を加えた充実したかれの教科書は好評であり、模範とされ、生涯にわたって孜々とした研究活動に満ちていた。大学の記念行事での祝辞や講演にも決まって適任であったし同僚たちも認めるところであった。学術教会とゲッチンゲン学者批評誌(GGA)にとってもかれは信頼のおける人だった。急な埋め合わせにも用意できる寄稿者であった。数多くの書簡を残し、独創的な思想家というよりは有益な教師であろうとした人である。しかしかれのエピグラムは、かれの生涯で今日でも早くから知られていたものらしい<sup>5)</sup>。そのエピグラムは自制心のない嘲笑癖、同時代人に対する抑制の効かない憎しみをあらわし、同僚たちのホルマン、クリスチャン、サムエル、ホルマンの娘婿といった個人的に衝突した人たちとも数十年間、怒りっぽい、下品な嘲弄詩句、悪意のある形容詞で追撃したようである。もっとも双方ともに似たような口調で応酬し合うのだろうが。かれの領分を侵そうとする者は、講義、著書を通して容赦なく威圧され、誹謗される。リヒテンベルクはかれとの衝突を恐れ、用心し、常に尻込み、教師に謝恩の念を抱く者としてだけでなく、かれの意地悪な人身攻撃を恐れていた。

リヒテンベルクがゲッチンゲンに到着したとき、ホルマン教授は66歳であった。哲学とすべてが実験で費やされる実験物理学も講じ、リヒテンベルクはそれを聴いた。老いは隠せなかったが、全体としては親しみある思い出を残している。ホルマンが残したゲオルギア・アウグスタ創設期の歴史の断片を1787年に読んだリヒテンベルクに幾多の思い出が甦った。

「ああ、ホルマン教授、わたしがあなたの残した5枚のものを読んだとき、まるであなたがまだ存命で、2本の健脚でわたしの前に立ち、教壇のまえで拝聴しているように思えました。ここに書かれたものの大部分は聴いたことがあるものです。スペイン人、ポーランドの靴職人、ガイスマール郊外の話など幾度も。それが分子間の凝集力のところか、流体静力学の授業でかまはや思い出せませんが、あるいは火焰か空気か電気の章であったのかも知れません。手元にある手稿が僅かなのが残念です。なぜなら全体は無数の列への天分をもっているにもかかわらずだからです。その天分をわたしは是非ともいくつかの文節肢をさがして読んだことでしょう。ゲッチンゲンでは解剖学を皮剥術の分枝部門とみなした歴史において、わたしにはこの学問にとっての熱中の中断が惜しまれます。」<sup>6)</sup>

ハラ<sup>7)</sup>の解剖学の講義にはときおり助手としても立ち会ったらしいこのブルーメンバッハ<sup>8)</sup>宛の1787年の手紙は、現在ワイマルにあるゲーテが所有した自署コレクションに収められている。ブルーメンバッハが、その手紙の最後にみごとに描かれたホルマンの特徴ある3つの顔の表情がよかったのか、ゲーテに寄贈したものである。

ゲオルギア・アウグスタ創設からの唯一の生き残りであるホルマンが創設50周年祭を2週間前にして1787年9月4日、90歳で亡くなった訃報にあたって同じくブルーメンバッハ宛にこう書いている。

「いい人だったホルマン教授。記念祭をこの世で迎えられなかった。でも天国できっと祝うことを忘れぬであろう。それにしても21年前に肺臓から半リットルもの膿を吐いた、このとても怒りっぽく強情な人にはなんという大往生！ こんどはなぜサイフォンが伸びるの

かがすでに解っているであろう。」<sup>9)</sup>

この手紙の文末の箇所はホルマンの学術的命題に関わっている。この命題とはかれの苦い誤りとして、かれの同僚ケストナーによって手厳しく非難されたものであった。ホルマンは空気ポンプの実験をもとに、「真空中でもサイフォンのなかは上がる」と主張した。今日ではそれは長いサイフォンからの水がそれによって押し出されるのは大気の圧力に過ぎない、とするのが、物理学知識の初歩である。ホルマンは自分の観察にたいする完全に納得のゆく説明を一般から得ようとして、ゲッチングン学術協会の1756年度懸賞論文を「サイフォンが真空中でも上昇するのはなぜ起こるか」というテーマのもとに募ろうとした。ケストナーとローヴィッツの同僚はこの課題の無意味さを主張し取り消しを求めた。その後ホルマンとケストナーの間には悪意に満ちた抗争が続いた。1760年にホルマンは学術協会から退会するが自分の命題には固執した。ホルマンがこの実験で真空中のサイフォンに圧力ポンプから押し出された水が昇ったのは、ポンプが気密でなかったのであろう。のちリヒテンベルクはヴォルフ宛の書簡で詳しく自分の実験装置を図説で説明する<sup>10)</sup>。この実験はかれも言うように簡単なものではなかった。

つぎに見る異色の人物はビュットナーという人である。もとはかれは薬種商人であり、ヴォルフェンビュッテルの豊かな薬種商の息子として生まれた。欧州を長年縦横に旅をして商い、英国国王ジョージII世のゲッチングン祝祭訪問の1748年に時を同じくしてこの地にやって来た。ビュットナー32歳の時であった。図書館を利用したり、教授たちと博物史や愛好する他の分野の勉強に関心を寄せ始め、この地に長逗留となった。かれは祖父から譲り受けた相当数の博物標本を持っており、多くのコレクターがそうであるように、経済的な犠牲をしてまでも熱心にこれらの標本陳列品を増やすことがかれの生涯の課題であった。かれはその膨大な標本を陳列する家をもっていた。だが、その当時大学での博物学史の授業では実際かれの標本室は役だった。大学には同種の標本陳列室はなかったからである。こうしたことから博物標本所有者にして蒐集家ビュットナーは大学側から親切にも引き続きゲッチングンに留まるよう勧められた。かれは「王立特別委員」なる称号が与えられ、正規聴講生であり、学術協会の賛助会員、学士、非常勤教授となった。リヒテンベルクが来た頃はすでに正規の教授になっていた。(O. Denekeはこう述べている：「すべてはただかれの陳列室の宝庫と珍しいものをゲッチングンのために確保する目的でなされたにすぎない」)

1755年の復活祭以後ビュットナーは当時のドイツの大学としては珍しい「博物学史」の講義を行うと予告するが、印刷された案内は出されなかった。通例の順序立った方法による講義をビュットナーはおそらく一度も行わなかったらしい。ピュッター版のゲッチングン学者史(1765年)には「かれの講演では物品自体の呈示とそのきわめて正確な模写(図版)によってすべてを説明しようとした。そのためにかれは実物と図ならびに博物標本からなる相当数の貯蔵品を個人で所有している。」さらにこんな記述もみられる。「博物学史に関してこのいわゆる教授団以上に何かよくわからないもの、見渡しの効かぬものは、たしかにほとんど考慮され得なかったが、問い合わせによりその人物の知識同様に非常に他種類の収集物を有する珍しい人から非常に沢山のことを学ぶことができたし、こうした方法で幾多のかれの同僚たち、ミヒャエリス、レードラー、のちにはシュレッツアーとガッターたちはかれをりっぱにもちいることに理解を示した。」<sup>11)</sup>ミヒャエリスは1761年にハラー宛にこう書い

ている。「かれは決して終わることができない膨大なもの以外の何事も考えていない。そして自分が問い合わされたこと以外の何も語らず、何も書かない。かれは一冊の真の書物であり、しかもきわめて秀でた本なのです。かれの知識は驚嘆すべきものであり、かれの友人リーダーとわたくしは大いにその知識のお陰を蒙っています。わたしたちはかれが正規に採用されるよう提案申し上げます。」標本なるものは自然界の物の存在を身近に観察するには格好の物である。固形のものには保存が容易であるとはいえ、動・植物の標本を作成するには保存技術を要する。保存は標本となって初めて自然界の物の永久保存ということである。ワイマルのゲーテもかなりな収集マニア<sup>12)</sup>であったが、この時代は森羅万象のすべてに人間として関心を示し始めた近代科学の曙ともいえる。学生たちにとってビュットナーは存在感は薄かった。もっともビュットナーなる人物は2名いた。学生も区別して、ビュットナーを鉱物標本室のことから「石のビュットナー」と呼び、もう1人は植物学のD・S・A・ビュットナー(1768年没)であるから通称「花のビュットナー」と称していた。1772年秋にブルーメンバッハが医学卒業候補生としてゲッティンゲンに来たとき、「非常に博識な奇人ビュットナー」はすでに長年講義を持たずに、学生たちにはあまり知られていなかった。こんなことから逆にミヒャエリス教授の息子で医学生フリッツ・ミヒャエリスがビュットナーの博物学史講義に学生を集めようと画策を施す。むろんこれは父親からの計らいであろう。幾人集まったか不明であるが、一種の歓談の場となって一週を通して博物学史の話はなかったようである。文化人類学としての栄えある学術キャリアのきっかけが、人間の博物学史とかけ離れないかれのための「コロクヴィウム」に与えられることになった。ビュットナーの標本はリヒテンベルクの勉学にとって価値に富んだ物であった。リヒテンベルクが臨む最初の学期の夏にビュットナーが予告したのはRinnéのシステムに従って博物史の百科事典を読もうと、いうものであったが、選ばれた聴講生サークルに限られていた。既に述べたように講義はなかったが、授業らしきものは知識欲の旺盛な若干の学生や、いくらか既に通曉した学生たちにかれの所有する自然界の珍しい宝物をみせる形だけででも行われたようだ。これらの学生のなかにリヒテンベルクが加わっていた。所有者の指導下にやがてリヒテンベルクは個々の物をすべて正確に知ったり、習熟することとなった。博物標本室を訪れることから、この弱冠23歳の教授との親しい交際が生まれた。ビュットナーは独身であったがのちにプリンツェン・ハウスといわれた大きな家を所有していた。この家の多くの部屋はかれの収集品で満たされ、犬、猿ほかの動物もそこで飼われていたようである。かれの家計は苦しく負債もあった。近くのユダヤ人、モーゼス・グンプレヒトとは親しく、親戚同様の関係であった。ゲッティンゲンの町でもユダヤ人の不動産所有は認められていなかったのだから、ビュットナーは自分の家の向かい側の家の名義貸しをグンプレヒトにしてやった。租税簿には当然ビュットナーの名前があるが、実際に税金のお金を出すのはグンプレヒトであった。

39歳の教授アルブレヒト・マイスターのもとでは応用数学、建築設計を聴講する。やがてよき友人関係を結ぶ。マイスターの本領は、野心家でも出しゃばりでもなく、静かな引きこもった生活を好んだ。かれの能力、高い知性、実直な性格についてリヒテンベルクは常に大いなる敬愛を籠めて記している<sup>13)</sup>。

専門学科の他にも歴史学者ヨハン・クリストフ・ガッテラーの授業も聴講した。リヒテンベルクは兄の師であるガッテラーに関心を少なからず寄せていた。この教授の主なる研究分

野は歴史記述の方法論および歴史の補助科学すなわち系譜学、年代学、紋章学、錢貨学などであり就中、古文書学であった。これらの分野を奨励するために当時 37 歳であったガッテラーは、1764 年 10 月 25 日に「歴史アカデミー」を創設する。これに参加したゲッティンゲンの教授たちの名を挙げれば、紋章学と調理法の愛好家の伝説の Colom du Clos、博識家の Ch. W. ビュットナー（石のビュットナー）、古典言語学者 Chr. Ad. Klotz、植物学の David S. A. Büttner（花のビュットナー）、図書館司書で医師の家の Georg Matthiae、ゲッティンゲンの偉大な歴史家の息子 Johann Tobias Kohler、司書にして校長の Jer. Eyring などがその会員であった。しかしこれらの中にはゲオルギア・アウグスタの名の知れた人たちはみられない。学生たちからはリヒテンベルク兄弟、J. C. Kestner, Polyc. Erxleben, Eymes、のちに有名な歴史家となった Johannes Müller などであった。学外からも会員参加を認めた。王室の認可を得てから 1766 年 12 月 23 日、「歴史アカデミー」は「王立歴史学研究所」と改称する。翌年から数えて 1782 年に至るまで 32 巻の刊行が同研究所会員と一般歴史図書館でまとめられている。この研究所では丹念な小規模の研究がなされ、歴史研究とその記述などの広範囲におよぶ提唱をあまり前提とせず、多くの仕事はすべてガッテラーの人柄でなされたようなものである。系統学、年代学、古文書学の発達をめぐる高い功績には定評があるらしい。1799 年 4 月 5 日のガッテラーの死を以てこの研究所も閉められるが、そののち 100 年後にゲッティンゲン大学古文書資料館が設けられ、かれは軽視できない先達とされる。リヒテンベルクは最初から「歴史アカデミー」の会員であった。かれは 3 つの講演発表を行い、知られているもののひとつは『歴史上の人の品性』<sup>14)</sup> (1765 年) と題したものである。

さらに親交を結んだ人のなかに、1762 年から 65 年までゲッティンゲンにいた当時 25 歳の古典言語学教授 Chrn. Adolf. Klotz<sup>15)</sup> がいた。かれは論駁されたレッシングの犠牲者として生き続ける。しかし偏見なしに、才能と長所を備えた人物であった。リヒテンベルクは G. A. Bürger と同様に、クロッツの 1771 年の死後もガラスの額縁にかれの肖像画を部屋に飾っていた。

神学部の教授たちには全く関心がなかったようである。せいぜい論争に相応しいもの程度であり、また法律学者にもそう関心はなかった。それでも Gebauer, Böhmer, Pütter, Achenwall, Selchow, Claproth などの名前は書簡のやりとりで親しげ語りかけられている<sup>16)</sup>。医師では、いずれも働き盛りで亡くなった R. A. Vogel<sup>17)</sup> と Ph. G. Schröder<sup>18)</sup> を評価していた。

哲学部で有名な人は、1763 年には既にゲッティンゲンに来ていた東洋言語学者 Joh. David Michaelis<sup>19)</sup> であった。この人の強靱な精神を必ずしも愛情を込めてリヒテンベルクは語るのではないが敬意は常に払っていた。古典言語学者、牧師の Kulenkamp<sup>20)</sup>、文学史家にして図書館司書の Dietze<sup>21)</sup> に対しても同様敬意を払っていた。Christian Gottlob Heyne<sup>22)</sup> は古典語教授、図書館長としてゲッティンゲンに到着したのはすでに述べたように、リヒテンベルクより 4 週間後であった。ハイネの講義にかれが出ていたことは確かなようだが、すぐに親しい関係はなかったせよ、早くからよい関係であった。

こうしたゲッティンゲンの精神的偉大なものが学生リヒテンベルクに、どれほど感嘆させたかは 1768 年の覚え書きがつぎのように記す<sup>23)</sup>。

「ドイツのある町で6年暮らす幸運に恵まれた。そこではおそらく大概のドイツ人のオリジナル・ジェニーがまとまって暮らしていた。少なくとも一緒にいる部屋にも喩えられる。そのほとんどの人をわたしは正確に知っていたし、あるいは少なくともある不十分な交際からわたしが失ったものを他の活動で補う機会がいつでも見つかった。物知りが暮らす町以外でその活動は知られることは稀である。その町では節度のある好奇心者からも逃れられなかった。わたしも不幸な作家たちと知り合った。自惚れた若い人で非常に勤勉であった。わたしはここにその2人において気づいたことを書いてみよう。大天才は往々にして非常に頻繁に熟慮したこと、あるいは単なる博識が決定する事柄でなければ、社会の自分の領分でない事柄に判定を下さないばかりか、自分の領分においても常に十分に判定をくたさない。大天才はローカルな考え方によって心を奪わせないこと、すべての出来事を個人のもののみならず、そして弱い人間に自然な奸策によらずに日常の事柄の最高の一般ジャンル<sup>24)</sup>のなかで事柄をすべて等しく気づかずにかすめ過ぎ去らせることなどを、自分自身ひとり悠然と日常の事柄への確かな注意深さを持っている。そこには偉大な精神の主要な識別があるようにみえる。だから世の何人も、主として物知りは、すべての事柄を地上の儂いものの最高の一般ジャンルのなかだけに、あるいは自己の感覚をわれわれの言葉のなかで表現し、嫌なものを無視し、調べるに値しないものを評価する実直なものたち\*よりは無能である。哲学者はこの点でむしろ自分の創始者を模倣しなければならない。また少なくとも親密な領域、ただ個体のなかだけでみなければならない。物事を観察するこの方法は天才の主要特徴である。むしろ天才は一切をそう眺めるのではない。でなければ天才は神自身でなければならぬだろう。物事を注視するこの方法は、天才に自己の周囲の事柄のある種の知識を与える。この知識は全く常に系統的ではないが、しかし誤りから真理を完全に正確ではないにせよ区別すること、しかも最初の重大な分離を飽くまで行うことで十分である。書籍を持たぬところでは文句なくこの類の認識が頻繁であり、書籍のあるところでは吹き飛ばされ得る。そしてそのような認識はそのように語ることを魂のなかに溶け込ませないし、魂とは決して一如化せず、むしろ魂が信念の系統からまだ切り離されているある場所から必要に迫られた場合にのみ取り出されるのである。そこではどれほど頻繁に間違っ手が出されることか。老人たちは通例そのような知識が豊富である。かれらの知っている一切が総体を形成し、このような総体が次第にかれらのなかで組み立てられたものが自然の成り行きであるから、かれらが話すときは確かにいつでも自然に語る。かれらの表現はシンプルであった。なぜならそれはかれらから話された自然であったからだ。この老人たちに熱心な読者が今後、純朴さを自分のものとするであろうなどとは思わないで頂きたい。即ち読者はその純朴さをすべての類似した作品中で再び識別するのに慣れるかも知れない。しかしその純朴さは読者における肉体とはならず、新しい姿で示されないかも知れない。わたしがここで言うことの一切を、またどの読者も今では自らを明らかにすることができるであろうことの一切を、わたしは多くの物知りに認めた。それが時折、あまりにも突然に読書によって駆り立てられた博識を通して別の側から再び示しているにもかかわらずである。なぜならば多くの物知りは、いわば近代の人間を自分たちの残りの部分、ギリシャ的なものと混同させているからである。不幸な作家、もしくはモダンな物知りは全くひとりぼっちで読み、かれの博学な信念は、かれ自身のうちに含まれず、かれの外側に含まれる。小さな魂はより大きな装置で飾られ、そのなかに順応す

る術を心得ていない。それが故のまずい作家が登場する無数の姿、それが故の誇張、自分との不釣り合い（下手な作家の主な特徴）、気取りである。

\* Hierher gehört Bogatzky, Senior Götze pp. (B22)」

オリジナル・ジェニー<sup>25)</sup>なる言葉がドイツ文学史上登場する時期としては、リヒテンベルクがこれを書いた5年後の頃の作家たちのことを一般にいうが、ここではゲッティンゲンの町の学者、教授たち、あるいは「林苑同盟」の詩人たちのことを暗に言っているのかも知れない。

1764年の夏この町に到着して1年を迎えた頃に愛する故郷の母親の訃報を受ける<sup>26)</sup>。奨学金のことでは大変な心配をかけたものであったが、今度はかれの主任教授ケストナーにダルムシュタット方伯へのその後の就学状況を証明する書状を依頼することとなった。これは給費生リヒテンベルクに出された奨学金が正しく費やされているかを証明するもので、ケストナーはヘッセン大公国国務大臣リーゼン宛につきのように書き送った。

「この者リヒテンベルクは当地に滞在に就き、数年来数学に大変な熱意をこめて精魂を傾けております。かれは数学、博物学などにおいてわたしの授業に出席し、その後、本校教授マイスター氏のもとで建築学と応用数学に属する他の知識などにおいてもいっそうの指導を得てまいりました。かれ独自の勤勉さはしかし、通常の大学生の勤勉さに期待されるものを凌ぐものがあります。わたしはこのことをわたしの著書、当大学図書館の利用状況、実験などを通じて十分に保証致しますし、かれの努力がやがて基本的、理論的見解の有益な結合によって大いなる実践的適合の才とともに非常に多くの利益をもたらすであらうことを信じて止みません。さらに付随的事情として申し上げなければならないのは、かれはこの思慮深いまじめな数学への打ち込みの他に、文芸、近代語、詩歌においても大いなる適合の才を有していることであります。このことが、いつもは非常に乾涸らびてみえる（数学の）ような知識を愉快なものにする才能がかれにはあります。そしてかれは教えるものにとっても、1人の非常に望ましい誇りある学生なのです。

陛下閣下男爵様。それゆえに益々わたくしがこの偏見なき叙述をご提出申し上げますのがわたしの義務であるとみなしますのも、ひとえにこのような若者の適合の才が、かれの祖国以外でもかれ自身のかなりの成功への希望を持たせ得るであろうからであります。』<sup>27)</sup>

ここで言及された近代語においても適合の才がある、とされているのは英語のことであるという。当時70歳であったJoh. Tompson教授の指導下にめざましい上達を遂げたのであった。1770年には第1回英国旅行をすることになるが、それも身分あるゲッティンゲン留学生の家庭教師していたことでその機縁が生まれたのである。

#### 註

- 1) 「リヒテンベルクの生い立ちに関して」明星大学研究紀要第8号13頁～23頁参照
- 2) Vgl. Otto Deneke: *Lichtenbergsleben*, 1944, S. 35-
- 3) 同上書 36頁
- 4) ケストナーについての文献資料は Wolfgang Schimpf: *Kästners Literaturkritik*, 1990を参照
- 5) Vgl. Otto Deneke, *ibid.* S. 38-
- 6) Vgl. *Brief an Johann Friedrich Blumenbach*, in: *GCLSB*, S. 522
- 7) Albrecht von Haller (1708-77) *Professor der Anatomie, Arzt, Botaniker und Dichter. Präsident der Göttinger Sozietät der Wissenschaft*. かれもケストナー同様GGA誌で活発な批評活動をし、叙情詩「アルペン」

- は有名。日本でも蘭学医らに馴染み深い
- 8) *Johann Friedrich Blumenbach* (1752-1840) *Professor der Medizin in Göttingen. Naturforscher und Ethnograph. in: GCLSB, S. 831*
  - 9) *Vgl. Brief an Johann Friedrich Blumenbach, in: GCLSB, S. 519*
  - 10) *Vgl. Brief an Wolf, in: Briefe, II (1782-89) Hildesheim, 1966. S. 162*
  - 11) *Vgl. Otto. Deneke. ibid. S. 41-*
  - 12) *Vgl. Goethe's Sammlungen. Dritter Theil: Mineralogische und andere naturwissenschaftliche Sammlungen. Mit einer Vorrede der Gebrüder von Goethe. Jena, 1849. Inhaltsverzeichnis. Mineralogische Sammlung a) Oryctognostische und Suitensammlungen (Gang-Suiten-Sammlung und Sammlung sächsischer Erze und Mineralien S.112 ff.) Seite 1-185, b) Geognostische Structur- und Suitensammlungen Seite 186-218, c) Gebirgsarten des Thüringer Waldes, vom Bergrath Voigt in Ilmenau Seite 219-241, d) Suite aus verschiedenen sächsischen Landestheilen von v. Charpentier Seite 242-252, e) Gebirgsarten des Harzes Seite 253, f) Mineralien aus der Mark Brandenburg Seite 253, g) Sammlung zur Kenntniss der Gebirge von und um Karlsbad Seite 253-256, h) Suiten aus verschiedenen Gegenden Seite 256-258, i) Marienbader Sammlung Seite 258-262, k) Suite des Fichtelgebirges Seite 262, l) Carlsbader Suite Seite 262, m) Sibirische Mineralien (vom Hofrath Loder, abgesonderte Sammlung in einem sehr schönen Etui.) Seite 263-266 Sammlung von Petrefacten und Abgüssen von solchen, nebst einigen Mineralien Seite 267-282 Naturhistorisches u. A Seite 283-288 a) Osteologisches Seite 283-284, b) Seethiere, Conchylien und Korallen Seite 284-285, c) Insecten Seite 285, d) Botanisches Seite 286-287, e) Ethnographisches Seite 287-288, f) Varia Seite 288-290, Physikalisches Seite 291-297*
  - 13) *Albrecht Ludwig Friedrich Meister* (1724-88) *Professor für angewandte Mathematik in Göttingen. Lehrer und Freund Lichtenberg. Vgl. GCLSB. Bd. 4-2, S. 856*
  - 14) *Vgl. Von den Charakteren in der Geschichte, in: GCLSB Bd. 2, S. 7-11*
  - 15) *Christian Adolf Klotz* (1738-71) *Professor der klassische Philologie in Göttingen. seit 1765 in Halle. Vgl. GCLSB. Bd. 4-2, S. 850*
  - 16) 以下はいずれも法学教授 *Georg Ludwig Böhmer* (1715-97), *Johann Stephan Pütter* (1725-1807) 国家法で有名。 *Gottfried Achenwall* (1719-72) *Professor für Philosophie. Las auch Geschichte, Statistik und Naturrecht in Göttingen. Lichtenbergs Lehrer, Johann Heinrich Christian von Selchow* (1732-95), *Justus Claproth* (1728-1805)
  - 17) *Rudolf Augustin Vogel* (1724-74) *Professor der Medizin in Göttingen.*
  - 18) *Philipp Georg Schröder* (1729-72) *Professor für Medizin in Göttingen.*
  - 19) *Johann David Michaelis* (1717-91) 息子は *Christian Friedrich* 北米ヘッセン軍にて従軍。のちカッセルで医学部教授
  - 20) *Lüder Kulenkamp* (1724-91)
  - 21) *Johann Andreas Dietze* (1729-85)
  - 22) *Christian Gottlob Heyne* (1729-1812) *Bedeutender Professor der klassische Philologie.*
  - 23) B-22: *Vgl. GCLSB. Bd. I, S. 87-88*
  - 24) この箇所は原文 *Indem Genere summo* に *in der höchsten allgemeinen Gattung* という注釈がある。 *in: G. C. Lichtenberg, Sudelbücher, 1984. S. 609*
  - 25) *Gerhard Kaiser: Geschichte der deutschen Lyrik von Goethe bis zur Gegenwart, Bd. I, Ffm. 1996. S. 73-74 "Die Bewegung des literarischen Sturm und Drang findet mit dem Originalgenie das ursprüngliche Volk, wobei dieses Finden auch ein Erfinden ist."*
  - 26) *Vgl. Franz H. Mautner: Lichtenberg, Berlin 1968. S. 6*
  - 27) *Vgl. Otto Deneke, ibid. S. 44-45*